

公益の風 #24



東北公益文科大学大学院
公益学研究科修了生
櫻井敬子

2年間の大学院生活で、私は2つのことを学修しました。

1つ目は、スクールソーシャルワーク(以下、SSW)の価値や視点、相談援助技術についてです。大学院修士課程1年次に、SSWの理論などを中心に学びました。例えば、学校内で問題行動を起こす児童を問題児として捉えるのではなく、なぜ問題行動を起こすのかをその児童の生育歴などから見つめることで暴れる行為に至った要因を明らかにすることが出来ます。しかし、福祉の専門職としては、単に生育歴などを把握するだけでなく、その問題の背景や要因を創造する力が求められます。大学院では知識だけでなく、想像力を

スクールソーシャルワークの学びと研究の集大成

はじめとする様々な力を養うことができました。

修士課程2年次には、庄内町教育委員会のスクールソーシャルワーカー(以下、SSWR)の下で実習をさせて頂くことができました。実際に、教育現場で活躍するSSWRの仕事を観察させて頂くことでSSWRと教員との児童生徒の情報共有の方法や児童生徒の抱える課題に対する認識の違いの調整方法など授業ではイメージができなかった内容を実践的に学ぶことができました。また、自身の弱みであった問題の背景や要因を想像する力を養う貴重な機会になりました。

実習を通じて、SSWRは「ドラえもん」のように手を差し伸べたり、見守ったりする存在であることを学びました。これらの学びから、SSWRとは教育を通じて児童生徒や保護者と向き合う教員とは異なり、教育と福祉の視点をもち児童生徒の抱える課題や悩みに対応した関わりをする専門職であると考えられるようになりました。

2つ目は、修士論文の執筆です。私は、「高校生の中途退学に対する意識と中途退学問題への取り組みのあり方―中途予防の観点から―」の研究に取り組みました。

文部科学省が発表した1950年の高校等進学率は、42・5%と50%を下回っていました。それが2020年には、95・5%まで上昇し、通信制高校を含めた進学率は98・8%と高い数値を示すようになりました。

しかし、進学率がほぼ100%に達している一方で、高校を中途退学する生徒は少なくありません。文部科学省の「令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」についてによると、令和2年度の中途退学率は1・1%となっていました。数値としては低いものの、実際には3万人以上の生徒が中途退学しているのが実情です。

既存研究では、中途退学者者に対する調査が多く行われていました。しかし、これから中途退学する可能性のある在校生に対しての調査が少ない状態であることがわかり、中途退学を予防するために必要な支援内容を明らかにするために、複数の高校の生徒を対象とした中途退学に関する意識調査を実施しました。また、意識調査に並行して、高校教員を対象とした中途退学に関する調査も実施しました。

調査の結果、いくつかの高校の中に地域とのつながりが密接な学校がありました。教員には話しにくいことでも地域の人の話を聴くことで地域の人から話せる生徒もいたことから、相談できる環境を整えることの重要性を確認することができ、中途退学の予防という観点から居場所カフェのような空間を高校内や地域につくることが高校生の中途退学予防に必要であるという結論に達しました。

大学院修士課程の2年間は、時間としてはとても短く、あっという間に終わりました。修士論文では、十分に明らかにできなかった課題が残されています。これからは、福祉の担い手として、実践者として、高校生が必要としている支援を明らかにし、子どもに寄り添えるソーシャルワーカー、SSWRになりたいと考えています。

調査の結果、いくつかの高校の中に地域とのつながりが密接な学校がありました。教員には話しにくいことでも地域の人の話を聴くことで地域の人から話せる生徒もいたことから、相談できる環境を整えることの重要性を確認することができ、中途退学の予防という観点から居場所カフェのような空間を高校内や地域につくることが高校生の中途退学予防に必要であるという結論に達しました。



令和4年度東北公益文科大学大学院修了式にて